

神戸女学院のヘンデル《メサイア》演奏史（序説）

津 上 智 実

Performance History of *Messiah* in Kobe College

TSUGAMI Motomi

要 旨

神戸女学院における G. F. ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の演奏史を、可能な限り遡って明らかにすることが本稿の目的である。学内（音楽学部、図書館、史料室）に残る演奏会資料を中心に、新聞や関連資料を調査して、《メサイア》演奏の流れを概観し、本学の《メサイア》演奏史を戦前・戦後に分けて、大きく時代区分して示した。

本学では、明治期（1908、1911）および大正期（1925）から《メサイア》の幾つかの楽曲が散発的に演奏されてきた。戦後は他団体（最初は進駐軍、その後は主に関西学院）との「合同演奏の時代」となり、1949年12月22日に初めて全曲演奏の舞台に乗った。この「合同演奏の時代」は大きく「(1) 大澤壽人先生時代」(1945～1954)と「(2) ラーソン先生時代」(1955～1959)とに区分できる。1964年からは「学部主催の時代」となって、4年に一度の演奏を原則として現在に至っている。

この内、1945年からの約10年について学内の資料が揃っておらず、特に1951年に《メサイア》を指揮したマーガレット・ダウに関する資料が欠けていると判明したことで、今後の課題も明らかとなった。

キーワード：ヘンデル、メサイア、神戸女学院、演奏史、合唱

Abstract

This paper aims to trace the performance history of G. F. Handel's oratorio *Messiah* at Kobe College as far back as possible. Based on the investigations of the records concerning the concerts kept in the campus (the Faculty of Music, the Library, the Historical Materials Room), and of related materials including newspapers, books and articles, it gives an overview of the history of *Messiah* performances given by and at the College in four chapters according to the periods: one prewar and three postwar.

Some vocal numbers of this work were sporadically performed at Kobe College as early as in the Meiji era (1908, 1911) and the Taisho era (1925). World War II was followed by the period of joint performances with other institutions (first with occupation soldiers, then mainly with Kwansai Gakuin University). In December 1949, Kobe College's Music Department joined the full-length performance of this oratorio for the first time. This period can be divided into (1) OSAWA Hisato's era (1945-1954), and (2) David Larson's era (1955-1959) according to the main conductors' names. In 1964, the current period of the Music Department's sponsorship arrived, in which *Messiah* is performed on a quadrennial basis.

My investigations have revealed that the materials in the campus are insufficient for about 10 years from 1945, especially concerning the music teacher Margaret Dow, who conducted *Messiah* in 1951. Further investigations of the documents outside the campus are still to be made.

Keywords: Georg Friedrich Händel, *Messiah*, Kobe College, performance history, chorus

0. はじめに

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685～1759) のオラトリオ《メサイア *Messiah*》(1741) は、神戸女学院にとって、これまでくりかえし演奏してきた特別な曲である。本学創立100周年 (1975)、125周年 (2000) といった記念の年には欠かさず演奏されてきた。近年は4年に一度は演奏するのが基本方針となっている¹⁾が、こうした習慣はいつから行われているのだろうか。本学における《メサイア》の演奏史を、可能な限り遡って明らかにすることが本稿の目的である。

『神戸女学院百年史』では、戦後最初のクリスマス礼拝で「音楽部の生徒と兵士とは大沢寿人教授の指揮のもとにメサイアを合唱し、ソロは当時音楽科の助教授であった野崎住子女史をはじめとした教師が引き受けた」(276) とあるが、その後の時代の音楽部 (1949年以降は音楽学部) の《メサイア》演奏については言及がない。

一方、『新しい歌をうたおう：神戸女学院大学音楽学部100年の歩み』では、戦後すぐの演奏に触れた後、「こののち、『メサイア』は定期演奏会の慣例となります。ラーソン先生時代は毎年、その後原則として4年に1度の周期で」(54) と記されている。グラビア・ページには、「伝統となったメサイア公演より」と題して1956年、75年、82年、94年、2004年の《メサイア》公演の舞台写真が掲げられている (66-67)。また、高橋秀明氏²⁾がコラム「神戸女学院の『メサイア』と私」を寄稿して、1973年以降の演奏について貴重な証言を残している。その中で、4年に一度の《メサイア》演奏について、「いつから始まったものかは定かではないが、学生にとって在学中に一度メサイアを体験しておくことは、卒業後の人生を豊かにする一助となるであろうとの配慮がなされているものと思う」(76) と述べている。

以上を踏まえて、ここでは主に学内に残る演奏会資料を調査して、《メサイア》演奏の流れを概観することを試みる。まず、資料の所在と調査範囲について述べた上で、本学の《メサイア》演奏史を戦前・戦後に分けて、大きく時代区分して示すこととする。

1. 資料の所在と調査範囲

《メサイア》の本学演奏史に関する資料として、第一に、音楽学部に保存されている過去の演奏会プログラム (1957, 64, 67, 73, 75, 79, 82, 86, 90, 94, 98, 2000, 04, 08, 12, 16) がある。それ以前の資料としては、史料室が所蔵する演奏会プログラム (1955, 56, 58, 59)、図書館が所蔵する「大澤壽人遺作コレクション」、4冊の音楽部スクラップ・ブック³⁾、「神戸女学院音楽部レッスン帳」⁴⁾ が重要である。1962年までは学報を兼ねていた同窓会誌の『めぐみ』

- 1) 音楽学部生が学部在学中の4年間に一度は演奏できるようにとの配慮によるもの。学生からは4年に一度ではなく、毎年でも歌いたいと要望書が出されたこともあったが、オーケストラの学生が学ぶレパートリーを広げる必要との兼ね合いから、この形に落ち着いている。
- 2) 同志社混声「シャンテ」の指揮者で、本学音楽学部事務長を長年 (1977～1988) 務めた。執筆当時は神戸女学院総務部長。
- 3) 筆跡からシャーロット・B. デフォレスト Charlotte Burgis De Forest (1879～1973、在任1905～1950) の手作りと思われる演奏会プログラムのスクラップ・ブックが4冊、所蔵されている。
- 4) 表紙に「音楽部 学生名簿・成績簿 1907 (明40)～1923 (大12)」と記された大判のノートで、記載内容から「神戸女学院音楽部レッスン帳」と呼ぶにふさわしい。詳細は津上 2010。

には、意外なことに、あまり言及がない。

学外の資料で参照したものとしては、大阪音楽大学の音楽記事集成⁵⁾、東京芸術大学附属図書館所蔵の「小山作之助旧蔵 演奏会プログラム等コレクション」⁶⁾、神戸市立中央図書館および国立国会図書館所蔵の『神戸新聞』『神戸又新日報』『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』等の新聞類と関連書籍がある。

日本における《メサイア》の演奏史に関する文献として、古くは奥田耕天「日本におけるメサイア初演」(1975)があり、最新のものとしては河村泰子「本邦における《メサイア》受容について」(2020)がある。河村の論考は「研究者や演奏家をはじめとして、数多くの合唱団や楽団、文化振興団体やホール関係者などから多大なご教示とご協力」(74)を得てまとめられたものだが、本学に関する言及は「KCGHクワイヤ」⁷⁾に関する一点のみで、「1970(昭和45)年までに開始され、長期間継続した全曲演奏のうち判明しているものをまとめた」表(58)に神戸女学院の名前はない。見落とされているのである。本学の《メサイア》演奏史をまとめることは、日本における《メサイア》受容の正しい理解にも資することになるだろう。

なお、チャールズ・ジェネズ Charles Jennens (1700~1773)の台本によるヘンデルのオラトリオ《メサイア》は3部から成る大曲で、独唱のレチタティーヴォとアリア(ないしアリオゾ)と合唱を中心に進められる。1742年の初演以降、ヘンデルの生前の上演歴は36回に上り、上演の度に曲の改訂やアリアの差し替えが繰り返し行われたため、多数のヴァージョンが存在する。個々の曲のカウントの仕方も使用楽譜のヴァージョンや演奏者によってまちまちなので、曲番を一元的に示すのは難しい。便宜上、本稿ではワトキンス・ショー編纂によるノヴェットロ・ヘンデル・エディション (Shaw 1992)の表記に従って曲番を示すこととする(後掲の表2参照)。なお、公演プログラム類については、それぞれの表記を尊重する。

2. 戦前の演奏

本学における《メサイア》の演奏は明治時代に遡る。

2-1. 戦前の演奏(1) 1908年

まず、1908(明治41)年12月の本学クリスマス礼拝において、《メサイア》から第9曲〈O Thou that tellest〉と第44曲の合唱〈Hallelujah Chorus〉の2曲が歌われたと考えられる。「神戸女学院音楽部レッスン帳」に、音楽部3回生(1910年卒業)のピアニスト小倉末子(1891~1944)が1908年秋学期にこの2曲のレッスンを受けたことが記録されているので⁸⁾、12月のクリスマス礼拝でこの2曲を女学院生が小倉のピアノ伴奏で歌ったと考えるのが順当である。あいにくなことに、1908年12月の学内行事に関して『めぐみ』では記載がすっぽりと抜

-
- 5) 大阪音楽大学に付設されていた楽器博物館で収集・保存された明治期以来の関西圏の音楽関係記事集成。現在は同校のミュージック・コミュニケーション専攻で管理されている。
 - 6) 東京音楽学校教授を退官後、音楽界の要職を歴任した小山作之助(1864~1927)のコレクションには、《メサイア》初演に関わるプログラムが残されている。その独唱者や合唱には本学関係者が含まれるが、主催も会場も指揮者も学外なので、ここでは論じない。
 - 7) 「神戸女学院高等部と関西学院高等部の生徒による合唱団」(河村 2020, 74)であるため、神戸女学院大学音楽学部にも史料室にも、この合唱団に関する資料は所蔵されていない。
 - 8) レッソンの指導者は音楽部創設者のエリザベス・タレー Elizabeth Torrey (1848~1921、在任 1896~1909)で、記載はシャーロット・デフォレストの筆跡による。

け落ちているため、日程等は不詳である。そこで『神戸新聞』『神戸又新日報』と『ジャパン・タイムズ *The Japan Times*』を調べてみたが、本学のクリスマス礼拝に関する記事は見出せなかった。ただ、12月26日付『神戸又新日報』第8067号7面6-7段に「神戸教会の聖誕祭」の記事があり、「夫からが各組みに分たれたる日曜学校の生徒が唱歌、暗誦、演説、対話、新体詩の朗読等を代る代る無邪気に愉快にやつてのけた」と報道されている。山本通キャンパス時代の神戸女学院生は毎週日曜日には神戸教会の礼拝に参列するのが通例であったので、この教会のクリスマス礼拝に女学院生が参加して上記2曲を歌った可能性も十分に考えられるが、資料的な裏付けは得られていない。

2-2. 戦前の演奏（2）1911年

さらに、1911（明治44）年12月14日に神戸女学院講堂で「声楽大会」が開かれ、《メサイア》から第18曲のソプラノのアリア〈Rejoice greatly〉が歌われた。この演奏会は「神戸頌栄幼稚園ハウ嬢は今回在北京の米国声楽家チャップ嬢の来神を機とし」て開かれたもので、「純益は挙げて同幼稚園の修繕費及び物品購入費に充つる由」（12月6日付『大阪朝日新聞』）と告知された。独唱者の「米国人シャープ氏」は、「本年二月以来北京にて音楽教師をなし居たれど革命動乱のため開校もなりかねて二週間前に来神したるものにて最も米、独、仏、伊四国の音楽に長じ居れる由」（12月6日付『神戸新聞』）と紹介されている。事前報道のプログラムはいずれも「メサイヤ」とあるのみで（12月7日付『神戸新聞』『神戸又新日報』）、どの曲を歌うかについては言及がない。後日の演奏会評を見ると、「プログラム第一部にシャープ嬢の独唱ハンデル氏の傑作メツサイヤに始まる」、「棕櫚竹と実南天の盆栽に飾られたる演奏壇に立ち」「ピアノ伴奏に連れて徐ろに『リジョイス』と口を開く」（12月16日付『神戸又新日報』）とあって、ソプラノのアリア〈Rejoice greatly〉を歌ったことが分かる。この演奏会では、「外にシャイブレー氏の独唱、ヒュース嬢のヴァイオリン演奏あり、女学院生徒及び県立高等女学校生徒の唱歌もありし」（同上）と報道されており、女学院生も合唱で出演しているので（曲目不詳）、本学関係者が多数講堂に参集して、これを聴いたものと考えられる。

2-3. 戦前の演奏（3）1925年

1925（大正14）年12月5日に本学講堂で本学音楽部主催の「ヘンデル、バッハ、ベートーヴェン作品音楽会」が神戸音楽協会会員の出演で開催され、その中で《メサイア》からの2曲、第45曲（第3部冒頭）のソプラノのアリア〈I know that my Redeemer liveth〉と第20曲（第1部）のアルトとソプラノの二重唱〈He shall feed His flock like a shepherd〉とが演奏された⁹⁾。

プログラム第一部では、ヘンデル〈ヴァイオリン・ソナタ〉第6番がシュルツのヴァイオリンとラスカ¹⁰⁾のピアノ、バッハ〈イタリア協奏曲〉がヴィラヴェルデ¹¹⁾のピアノで演奏され、第二部でヘンデルの「聖曲メサヤ中のアリア及二重唱」がウィロワード¹²⁾のソプラノとグレー

9) 本学図書館が所蔵する音楽学部のスクラップ・ブック「十字架」（表紙に十字架のコラージュが貼り付けてある）所収の演奏会プログラムの現物による。

10) Joseph Laska（1886～1964）。オーストリア人の作曲家・指揮者。宝塚交響楽団の創設者。本学音楽学部教授（在任1935.4～10）。

11) Pedro Villaverde（生没年不詳）。スペイン人のピアニスト。大澤壽人や原智恵子にピアノを教えた。

12) Mme. Wellwood（生没年不詳）。

ヴズ¹³⁾のアルトで歌われ、最後にバッハ=ブゾーニ〈シャコンヌ〉とベートーヴェン〈ピアノ・ソナタ〉作品27-2「月光」がフツエーフ¹⁴⁾のピアノで演奏されている。

1925年は本学創立50周年に当たり、記念の演奏会が10月10日に学生と教員の出演で行われた¹⁵⁾。12月5日の演奏会は、残されたプログラムにも『めぐみ』にもその旨の記載は見出せないが、音楽部主催でもあり、有力演奏家と教員の出演による一種の記念演奏会という性格があった可能性が考えられる。

3. 戦後の演奏

戦後の演奏については、基本データを「表1：戦後の《メサイア》演奏歴」にまとめて末尾に掲げる。

3-1. 戦後の演奏（1）1945年

戦後最初の本学クリスマス礼拝（1945年12月20日、本学講堂）で《メサイア》からの抜粋が大澤壽人¹⁶⁾指揮、野崎住子¹⁷⁾と数名の将校の独唱、進駐軍兵士と音楽部コーラスの合唱で演奏された¹⁸⁾。アメリカ軍兵士との共演は、宝塚大劇場での進駐軍のクリスマス礼拝（12月23日）¹⁹⁾と神戸栄光教会（12月25日）でも行われた（De Forest, 1950, 189）。この《メサイア》抜粋の演奏は『神戸女学院百年史』でも言及され、本学の演奏として最もよく知られたものであるが、ハレルヤ・コーラスの他にどの楽曲を歌ったのかといった詳細は未詳で、今後、関連資料が関係者の手によって学院に寄贈されることを期待したい。

3-2. 戦後の演奏（2）1945～1954年「合同演奏の時代（1）大澤壽人先生時代」

「大澤壽人遺作コレクション」には貴重な演奏会プログラムが残されている。1949年12月22日に大阪朝日会館で行われた《メサイア》公演のプログラムである²⁰⁾。この演奏会は関西学院宗教総部主催、JOBKと進駐軍WVTQとの協賛によるものであったが、大澤壽人指揮、大阪放送交響楽団、独唱はソプラノ笹田和子、アルト野崎住子、テナー木下保、バス中山悌一、合唱は関西学院グリークラブと神戸女学院音楽部であった。「序曲、田園交響曲を含めて合唱曲、独唱曲などの合計30曲で、演奏時間2時間を越える大演奏会」（山中 1981, 269）で、本学音楽学部のコーラスが初めて《メサイア》の全曲演奏の舞台に上がった画期的な演奏会と位置付

13) Stella Marie Graves (1895～1968)。ABCFM 日本派遣独身婦人宣教師。オバーリン大学で声楽を学んだ専門家として本学音楽部長（在任1924.9～1927.4）に迎えられた。

14) Ekaterina Gruenberg Huzieff (1880～1958)。ロシア人のピアニスト。本学音楽学部教授（在任1925～1946）。

15) 1926年1月発行『めぐみ』臨時号5頁に「創立五十年記念音楽会（プログラム）」が掲載されている。ピアノ独奏、ヴァイオリン独奏、独唱（リムスキーコルサコフ、チャイコフスキー）と合唱（フレッチャー作曲〈海象と大工〉）であった。

16) 大澤壽人（1906～1953）。作曲家・指揮者。本学音楽学部教授（在任1948～1953）。

17) 野崎住子（1904～2009）。本学第43回卒業生、音楽部声楽教授（在任1926.4～1970.3）。

18) 会場写真が残されている（神戸女学院大学音楽学部100年史編集委員会 2007, 40）。

19) 宝塚大劇場では「着物を着てハレルヤコーラスと一緒に合唱した」との述懐がある（「私たちの学生時代」を発行する会 1999, 203）。

20) 関西学院グリークラブからもプログラム・データの提供を頂いた。お世話くださった121代部長徳島良亮氏に御礼申し上げます。

けられる。この時の録音が12月25日に NHK 大阪から全国放送された（同、270；大澤資料プロジェクト編 2011, 311）。出演に際して、男声との共演に学内から強い反対があったエピソードが伝えられている（生島 2017, 405）。

学内に残る資料を見る限り、本学音楽学部による《メサイア》演奏はこの後、しばらくブランクがあるように見える。しかし、学外の資料に目を向けると、それは事実と乖離しているということが見えてくる。

この時期の動向については、山中源也『関西学院グリークラブ八十年史』が詳しい。1950年以降の本学音楽学部との《メサイア》演奏を抜粋すると次のようになる。

1950年12月21日「Osaka Army Hospital へ赴き、神戸女学院音楽部と合同で『Messiah』を演奏」（280）。

1951年12月16日「Osaka Army Hospital の礼拝堂へ赴き、グリークラブ、神戸女学院音楽学部コーラスと合同で、同学部長 M. Dow 女史²¹⁾の指揮により『Messiah』（ヘンデル）のうち26曲を演奏」、「12月22日も午後2時からNHK（大阪）で、『Messiah』の録音（12月25日放送）が行われた。指揮は大沢寿人、合唱は学院グリークラブと神戸女学院音楽部コーラス、オーケストラは大阪放送管弦楽団²²⁾（291-292）。

1952年12月10日「午後6時から大阪・産経会館で、大阪YMCA主催のクリスマス音楽の夕が開かれ」「神戸女学院音楽学部の女声合唱（同学部長 M. ダウ女史指揮）、下里智恵子のソプラノ独唱があり、最後にグリークラブと神戸女学院音楽学部の混声合唱に移り、M. ダウ女史の指揮で『エサイの根より』『クリスマスの夜はよろこび歌いて』『ともよろこべや』『ハレルヤ！』（ヘンデル）をうたった」（303）。

1953年12月15日「午後6時から大阪・産経会館で、大阪YMCA主催のChristmas Music Concertが開かれ、グリークラブと神戸女学院音楽学部合唱団が出演した。プログラムは両合唱団にグリー顧問・スタッフス教授の独唱を入れて構成」「最後に同女学院音楽学部長 M. ダウ女史の指揮で『ハレルヤ！』（ヘンデル）をうたって幕を閉じた」（316）。

このように、1949年から継続的に本学音楽学部との合同演奏が続いていたことが記されている。指揮を担ったのは大澤壽人とマーガレット・ダウで、共に本学音楽学部の教授であった。『関西学院グリークラブ八十年史』は資料に基づいて書かれたものと思われる、その情報は信頼に足ると考えられる。この間の女学院側の資料が伝わっておらず、いわば「空白時代」となっているのはなぜだろうか。今後、更なる資料の収集が望まれる。

21) Miss Margaret Dow（?～2000）。北方中国伝道団所属の宣教師（1929～1947）であったが、中国革命の影響で中国から引き揚げて、本学声楽助教授（在任1951～1954）・学生主事（1952～1953）・教授（1954年4月～同年秋）を務めた。

22) 『大澤壽人遺作コレクション』詳細目録』に放送の記載がある（大澤資料プロジェクト編 2011, 319）。演奏曲目は〈かくして主の栄光は〉〈彼はレビの息子たちを清め〉〈いと高きところに神の栄光〉〈私は知る私をあがなうものは生きておられる〉〈ハレルヤ・コーラス〉〈子羊こそふさわしけれ〉〈アーメンコーラス〉。

一方、中高部のクラブ活動のコーラス部は、この間に関西学院と合同で《メサイア》演奏を行なっている。1950年4月17日発行『高校新聞』第11号2面に「コーラス部は4月25日、メサイアから2曲と賛美歌をBKから放送したようです」、1951年3月発行『めぐみ』第34号7頁「中高部便り」に「関学高等部グリークラブと連合してBKよりヘンデルのメサイアを放送したり、関学の講堂や本学院の講堂で演奏して好評を博した」とある²³⁾。

指揮者の長井斉の回想録には「KCGH 第1回メサイア演奏会（1950年12月9日、於関西学院）」の写真が掲載されている（長井 1980, 96）。キャプションに「写真は神戸女学院図書館で」とあり、確かに本学図書館本館の中庭側で撮影されたものである。KCGH という名称は「神戸女学院のKCと関西学院のKGを組み合わせた上に高等部のHを合わせたもので、私が即座に命名したものである」と長井は言う（同書, 94-95）。なお、『関西学院グリークラブ八十年史』にはKCGHに関する言及は見られない。

3-3. 戦後の演奏（3）1955～1959年「合同演奏の時代（2）ラーソン先生時代」

1955年からの5年間は「合同演奏の時代（2）ラーソン先生時代」と呼ぶことができる。すなわち、関西学院大学、同志社大学（1955年のみ）と神戸女学院大学というキリスト教系の大学が合同で《メサイア》公演に取り組んだ時代である。主催は大阪YMCA²⁴⁾で、5年連続で大ホールでの上演が行われた。

指揮は1954年10月に本学音楽学部教授として迎えられたデヴィッド・ラーソン Dr. David D. Larson (1926～1987) (在任1954～1968) で、1955年の公演プログラムで次のように語っている。

多くの「メサイア」演奏の中、最も私の記憶に残っているものは昭和20年東京に於けるそれである。この戦後初めての演奏は長い間我々を掩っていた戦争の闇を打ちはらつて新しい世の夜明けをつげたものとして、日本の方々とつても我々外国人にとつても非常に意味深いものがあつたと思う。この時こそ私は後日再び日本を訪れることを確く決心したのであつた。駐留軍の一兵士としてではなく一音楽教師として——。そして昨年私はこの望みを遂げることが出来たのである。

平和と友愛の象徴としての《メサイア》演奏に情熱を抱いて本学に赴任したことが伝わってくる。演奏に際しては、「クリザンダーによるヘンデル協会版（1892年）モーツァルトの編曲（1803年）プラウト版（1902年）スピッカー（1912年コーラス版のみ）クーパースミス（1946年コーラス版）等を参照しながら独自の解釈に到達している」、「ただ演奏時間の関係から全体の劇的な流れを阻害しないように削除を加える」との解説が付されている。

後掲の「表2：《メサイア》演奏内容一覧」を見ると分かるように、ラーソンの4年目（1958年）の上演は特別なものであった。ヘンデル没後200年という記念の年に当たり、通常はカットされるナンバーが多数取り上げられて演奏された。第35曲の合唱〈Let all the angels of God worship Him〉、第36曲のバスのアリア〈Thou art gone up on high〉に加えて、「この詠嘆調〔第48曲〈The trumpet shall sound〉〕の中間部は殆どの場合省略されるが、今夕を〔ママ〕それを演奏する。これに続くアルト、テノール、合唱の一連〔第49曲から第51曲〕も、いつもかなら

23) 史料室の佐伯裕加恵氏に教えて頂いた。

24) 1956年のみ関西学院グリークラブと関西学院交響楽団の主催。

ず省略されるものである」、「これに続くのは、確信と信仰を歌った美しいソプラノの詠嘆調 [第52曲 〈If God be for us〉] で、これが普通かならず省略されるのは残念である」といった具合に、通常は省略される曲を特別に演奏する旨の説明がプログラムでなされている。

3-4. 戦後の演奏（4）1964年以降「学部主催の時代」

本学の《メサイア》公演は、1964年から神戸女学院大学音楽学部主催で行われるようになり、「学部主催の時代」を迎える。指揮者はラーソン（1964）、ヴリーゲン（1967）、八代秀夫（1973）と引き継がれ、本学創立100周年記念の1975年には朝比奈隆（1908～2001）を迎えている²⁵⁾。林達次（1979, 82）、ラーソン（1986）の後、中村健（1990, 94, 98, 2000, 04, 08, 12）が20年余りにわたって伝統を引き継ぎ、2016年からは松浦修が任に当たっている（敬称略）。

ソリストは、音楽学部の教員を中心に担われてきた。声種によっては学外から招聘したり、優秀な学生を抜擢した年もある。オーケストラは大阪フィルハーモニー交響楽団（1964）、大阪カテドラル管弦楽団（1967）と外部団体の協力を得ていたが、1973年からは「神戸女学院大学音楽学部オーケストラ」が担うようになって今日に至っている。男声合唱については、関西学院グリーンクラブを始めとして、同志社グリーンクラブ、神戸中央合唱団、新月会、クローバークラブ等の協力を得てきた。学内の教職員²⁶⁾も積極的に参加して、一緒に舞台を作り上げるのが本校の伝統となっている。

4. おわりに

以上から、本学におけるヘンデルの《メサイア》演奏は、明治期（1908, 1911）および大正期（1925）から幾つかの楽曲が散発的に演奏されてきたこと、戦後は他団体（最初は進駐軍、その後は主に関西学院）との「合同演奏の時代」となり、1949年12月22日に初めて全曲演奏の舞台に乗ったこと、「合同演奏の時代」は大きく「（1）大澤壽人先生時代」（1945～1954）と「（2）ラーソン先生時代」（1955～1959）とに区分でき、1964年からは「学部主催の時代」となって、4年に一度を原則として現在に至っていることが浮かび上がってきた。

この内、1945年からのほぼ10年については、学内の資料が揃っていないことが判明した。戦後の混乱の時代だったせいもあるのだろう。関係者の協力を求めて充実を図りたい。

本学音楽学部コーラスについて、1955年の《メサイア》公演プログラムは、「ヨゼフ・ラスカ氏によって育てられたコーラスは、宮原禎二、大沢寿人両教授により益々磨かれ、放送に、ステージに、華やかな活躍を続けた。大沢教授の後を受けたマーガレット・ダウ教授の下にコーラスは京浜、山陽、四国の各地に毎年演奏旅行を行つて経験を積んだ」（5）と紹介している。この内、ヨゼフ・ラスカと大澤壽人については近年の再評価が目覚ましい。この後を引き継いだラーソンは、本学と長く深く関わったこともあり²⁷⁾、さまざまな場でその人と業績が言及されている。一方、1951年12月16日に大阪アメリカ陸軍病院（Osaka Army Hospital）礼

25) ラーソンが休暇帰米中（1959～1961）の1959年にも指揮をしている。

26) 例えば、直近の2016年の《メサイア》公演では、ソプラノに浜崎希（卒業生、職員）、アルトに柿原晴香（卒業生、職員）、西野美香（卒業生、AVセンター職員）、テノールに飯謙（総合文化学科教授）、バスに森浩一（神戸女学院院長）、河西秀哉（総合文化学科教授）、三浦欽也（人間科学部教授）が参加して学生と共に歌った（肩書はいずれも2016年当時）。

27) 帰米後、アメリカの本学支援団体（Kobe College Corporation）の長を長く務めた（在任1970～1984）。

拝堂で《メサイア》から26曲を指揮したマーガレット・ダウについては語られることが少ない。関連資料の掘り起こしによって、しかるべき評価をしていくことが必要であると思われる。

今年1月8日に帰天した中村健は、2008年のプログラムに「今回の使用譜について」を寄稿し、モーツァルト編曲版の《メサイア》(K527)を基本としながら、「管楽器群をさらに注意深く改訂し、とくに合唱曲のトロンボーンの用法はモーツァルトのレクイエムを参考とした」、「トランペットの場合のような『不本意な選択』では、原典版をよりどころとし」と記している。歴代の指揮者は、演奏会場の音響や各楽器の専攻生の学びの可能性などを考慮しながら、より良い演奏をめざして自ら編曲するといった努力を重ねて²⁸⁾、本学における《メサイア》演奏の伝統を担ってきた。

今年の《メサイア》は、新型コロナ・ウイルスの感染防止対策として、女声三部合唱版で歌われる。戦後初の《メサイア》が若き日のデヴィッド・ラーソンに火をつけたように、コロナ下の《メサイア》が人々の心に力と覚醒をもたらすことを願って筆を置く。

参考文献

- 生島美紀子 2017 『天才作曲家 大澤壽人』 東京：みすず書房
- 大澤資料プロジェクト編 2011 『煌きの軌跡Ⅱ：神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録』 西宮：神戸女学院
- 奥田耕天 1975 「日本におけるメサイア初演」 日本基督教団出版局『礼拝と音楽』7：23-24
- 河村泰子 2020 「本邦における《メサイア》受容について」『音楽を通して世界を考える——東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集』 東京：東京藝術大学出版会、54-76
- 神戸女学院大学音楽学部100年史編集委員会 2007 『新しい歌をうたおう：神戸女学院大学音楽学部100年の歩み』 西宮：神戸女学院
- 神戸女学院百年史編集委員会 1976 『神戸女学院百年史』 西宮：神戸女学院
- 津上智実 2010 「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907～1923）の資料的価値とその内実」『神戸女学院大学論集』 57-2：141-153
- 長井斉 1980 『み翼のかげに、合唱音楽と共に歩んで』 大阪：大阪コーラル・ソサエティ
- 長谷川千彰、富岡ひとみ 2006 「音楽教師一覧表」 神戸女学院史料室『学院史料』21：13-17
- 山中原也 1981 『関西学院グリークラブ八十年史』 西宮：関西学院グリークラブ部史発行委員会
- 「私たちの学生時代」を発行する会 1999 『私たちの学生時代 神戸女学院のものがたり：専門学校最後の卒業生が巣立って50年』 「私たちの学生時代」を発行する会（神戸女学院同窓会館内）
- DeForest, Charlotte B. 1950, *The History of Kobe College: compiled on the occasion of the seventy-fifth anniversary of Kobe College, Nishinomiya, Japan, 1875-1950*, Kobe College Corporation.
- Shaw, Watkins ed., 1992. *Handel: Messiah, The New Novello Choral Edition*, London: Novello & Company Limited.

謝辞：本稿の執筆は神戸女学院大学研究所の2019年度と2020年度の研究助成によって支えられていることを記して感謝する。また、関係各団体・部署には資料提供で大変お世話になったことも特記して謝意を表する。

（原稿受理日 2020年9月27日）

28) 大澤壽人も《メサイア》から5曲（〈かくして主の栄光は〉〈彼はレビの息子たちを清め〉〈私は知る私をあがなうものは生きておられる〉〈ハレルヤ・コーラス〉〈子羊こそふさわしけれ〉〈アーメンコーラス〉）を編曲している（大澤資料プロジェクト編 2011, 345）。

表 1 : 戦後の《メサイア》演奏歴

(1) 1945～1954年「合同演奏の時代 (1) 大澤壽人先生時代」

年月日	1945-12-20	1945-12-23	1945-12-25	1949-12-22	1950-12-21	1951-12-16	1951-12-22
会場	KC 講堂	宝塚大劇場	神戸栄光教会	朝日会館	Osaka Army Hospital	Osaka Army Hospital 礼拝堂	NHK 大阪
指揮	大澤壽人	大澤壽人	大澤壽人	大澤壽人		M. ダウ	大澤壽人
ソプラノ	野崎住子	野崎住子	野崎住子	笹田和子			
アルト				野崎住子			
テノール				木下保			
バス				中山悌一			
鍵盤楽器							
女声合唱	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM
男声合唱	進駐軍兵士	進駐軍兵士	進駐軍兵士	KG	KG	KG	KG
管弦楽	ピアノ伴奏			大阪放送交響楽団			大阪放送交響楽団
演奏曲数				30曲		26曲	7曲
主催	KC	進駐軍	神戸栄光教会	関西宗教総部			
後援				JOBK、WVTQ 協賛			
備考	クリスマス礼拝 *	クリスマス礼拝 *	クリスマス礼拝 *	全国放送 (12/25)	*	*	放送 (12/25) *

略号) KC = 神戸女学院、KCM = 神戸女学院大学音楽(学)部、KG = 関西学院グリークラブ、* = プログラム等の詳細未見、
P = ピアノ、Or = オルガン、C = チェンバロ

(2) 1955～1959年「合同演奏の時代 (2) ラーソン先生時代」

年月日	1955-12-14	1956-12-12	1957-12-16	1958-12-18	1959-12-18
会場	産経会館	宝塚大劇場	朝日会館	フェスティバルH	フェスティバルH
指揮	D. ラーソン	D. ラーソン	D. ラーソン	D. ラーソン	朝比奈隆
合唱指導					
ソプラノ	野崎住子	野崎住子	下里智恵子	下里智恵子	下里智恵子
アルト	別所恵子	C. デイック	C. デイック	黒田ナミエ	黒田ナミエ
テノール	片岡通昭	片岡通昭	片岡通昭	片岡通昭	片岡通昭
バス	水谷堅	北村音彦	北村音彦	北村音彦	北村音彦
鍵盤楽器	P: 駕淵紹子	P: 辻智美			
女声合唱	KCM: 45/45	KCM: 23/24/26/23	KCM: 51/41	KCM: 61/55	KCM: 53/49
男声合唱	KG: 16/24/24/27	KG: 15/23/22/21	KG: 46/47	KG: 45/51	KG: 56/58
管弦楽	同志社交響楽団: 10/10/6/6/4; 3/2/3/2/2/2/3; 1	関西学院交響楽団: 15/18/7/10/7; 7/3/4/3/5/4/3; 1	関西学院交響楽団: 8/10/6/6/3; 2/2/2/2/3/3/2; 1	関西交響楽団	関西交響楽団
主催	大阪 YMCA	KG、関西学院交響楽団	大阪 YMCA	大阪 YMCA	大阪 YMCA
後援	朝日新聞厚生文化事業団	関西文化総部・宗教総部	朝日新聞厚生文化事業団	朝日放送	朝日放送
備考		協賛: KCM	大阪 YMCA ユース・セン ター建設資金のため		

注1: 合唱の人数は、プログラムによって「ソプラノ/アルト/テノール/バス」に分けられている場合と、各々第一と第二に分けられている場合とがある。

注2: 管弦楽の人数は、「弦5部: Fl/Ob/Fag/Trump/Tromb; Timp」を基本として示している。

(3-1) 1964年以降「学部主催の時代」

年月日	1964-12-8	1967-12-12	1973-12-16	1975-12-9	1979-12-3
会場	神戸国際会館	神戸国際会館	西宮市民会館	神戸国際会館	大阪厚生年金会館
指揮	D. ラーソン	R. ヴァリーゲン	八代秀夫	朝比奈隆	林達次
合唱指導			林達次	加藤直四郎	加藤直四郎
ソプラノ	河辺道子	鮎田純子	岡田晴美	岡田晴美	釜洞祐子
アルト	松本勝代	黒田ナミエ	広沢節子	広沢節子	荒田祐子
テノール	石井昭彦	伊藤富治郎	田原祥一郎	田原祥一郎	鈴木寛一
バス	林達次	林達次	林達次	林達次	木川田誠
鍵盤楽器		Or: 鷲渕紹子	C. 小林政子 Or: 榎本るつ子、松本裕子	Or: 高橋裕子、勝村みどり	C. 田中景代 Or: 藤田希恵、川竹澄子
女声合唱	KCM: 58/54	KCM: 59/70	KCM: 91/102	KCM: 83/84	KCM: 73/84
男声合唱	KG: 53/54	KG: 50/42	同志社大学 G: 32/37	同志社大学 G: 38/28 クローバークラブ: 13/13	神戸中央合唱団: 23/38
管弦楽	大阪フィルハーモニー交響楽団	KCM: 9/9/0/5/1; 大阪カテドラル管弦楽団: 6/6/4/4/2; 2/2/2/2/2/3:2	KCM: 10/8/4/5/3; 3/2/2/2/2/2/3:1	KCM: 8/8/6/5/3; 4/2/2/2/2/2/3:1	KCM: 7/7/4/3/3; 6/2/2/2:1
主催	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM
後援				クラブファンタジー	
備考			Praut 版	創立百周年記念 Praut 版	「簡素な原典版にフルートを 加えたもの」

(3-2)

年月日	1982-12-2	1986-12-3	1990-12-6	1994-12-5	1998-12-8
会場	ザ・シンフォニー	ザ・シンフォニー	ザ・シンフォニー	ザ・シンフォニー	ザ・シンフォニー
指揮	林達次	D. ラーソン	中村健	中村健	中村健
合唱指導					中村健、本山秀毅
ソプラノ	釜洞祐子	釜洞祐子	岡田晴美	大森地塩	齊藤言子
アルト	荒田祐子	荒田祐子	井上和世	荒田祐子	西明美
テノール	鈴木寛一	若本明志	若本明志	若本明志	若本明志
バス	木川田誠	木村俊光	木川田誠	橋茂	多田羅迪夫
鍵盤楽器	C. 田中景代、Or. 山内晴子	C. 橋本依子、Or. 太宰まり	C. 秋田直美、下西美都	C. 林美枝、中嶋あすか、 小島景子	C. 東絵美、吉田真紀、 中野佳代子
女声合唱	KCM : 68/82	KCM : 80/72	KCM : 101/90	KCM : 95/90 + 12 + 8 ; 9	KCM : 99/105
男声合唱	京都産業大学 G : 37/47	同志社 G : 48/44	神戸中央合唱団 : 8 ; 12/23 新月会 : 21/20	神戸中央合唱団 : 13/18 新月会 : 24/25 有志 : 1/5	神戸中央合唱団 : 8/22 新月会 : 23/18 有志 : 3/3 教職員有志 : 1/4
管弦楽	KCM : 7/6/4/4/3 ; 2/2/1/2 ; 1	KCM : 9/8/5/3/3 ; 0/2/1/2 ; 1	KCM : 8/9/7/6/3 ; 0/2/2/2 ; 1	KCM : 14/6/4/2 ; 0/2/1/2 ; 1	KCM : 18/4/5/4 ; 0/2/1/2 ; 1
主催	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM
後援					
備考					

(3-3)

年月日	2000-12-9	2004-12-1	2008-12-5	2012-12-4	2016-12-2	2020-11-25
会場	神戸国際会館	神戸国際会館	兵庫県立芸術文化センター	兵庫県立芸術文化センター	兵庫県立芸術文化センター	兵庫県立芸術文化センター
指揮	中村健	中村健	中村健	中村健	松浦修	松浦修
合唱指導	中村健、本山秀毅	中村健、本山秀毅	中村健、沼丸晴彦	中村健、山本哲也	山口英樹	山口英樹
ソプラノ	斉藤言子	鎌田貴子	斉藤言子	斉藤言子	斉藤言子	斉藤言子
アルト	西明美	古田昌子	西明美	西明美	山田愛子	古田昌子
テノール	吉田浩之	西垣俊朗	小餅谷哲男	松本薫平	松本薫平	松本薫平
バス	橘茂	萩原次己	雁木悟	萩原寛明	萩原寛明	萩原寛明
鍵盤楽器	C. 中野佳代子	C. 田中靖子 Or. 川勝さちこ	Or. 川勝さちこ	C. 下西美都 Or. 片桐聖子	C. 中出悦子 Or. 片桐聖子、米澤唯	C. 中出悦子 Or. 竹嶋南帆 山田佳世子 森友歌
女声合唱	KCM : 102/105	KCM : 91/90	KCM : 83/82	KCM : 72/68	KCM : 73/64	KCM : 37/35/38
男声合唱	同志社 G : 28/32 クロバークラブ : 7/8 神戸中央 : 9/20 同志社シヤンテ : -/2 教職員 : 1/4	同志社 G : 26/21 神戸中央 : 10/15 新月会 : 16/17 教職員 : 1 : 1/3	神戸中央 : 8 ; 10/23 新月会 : 16/20 同志社混声シヤンテ : 6/4, 13/10 教職員 : 2/4 ; 4/1	神戸中央 : 8/21 新月会 : 11/14 同志社 G : 20/16 同志社混声シヤンテ : 9/11 ベガメサイアを唱う会 : 3/5 メサイアを歌い続ける 会 : 1/3+2 教職員 : 2/0/2/5	KCM 賛助合唱団 : 39/46 教職員 : 1/2/1/3	—
管弦楽	KCM : 9/7/4/4/3 ; 0/2/1/2 : 1	KCM : 17/4/4/4 ; 0/2/1/2 : 1	KCM : 19/6/6/4 ; 9/2/2/3/2/2/3 ; 1	KCM : 18/4/4/3 ; 0/2/2/2 : 1	KCM : 20/7/5/4 ; 0/2/1/2 : 1	KCM : 22/7/5/4 ; 0/2/1/2 : 1
主催	KC、KCM	KCM	KCM	KCM	KCM	KCM
後援	CF					
備考	創立125周年記念		モーツァルト版を改訂			女声三部合唱版 (雷岡正男編曲)

表2：《メサイア》演奏内容一覧

		歌詞冒頭／年	1949	1951	1955	1956	1957	1958	1959	1964	1967	1973	1975	1979	1982	1986	1990	1994	1998	2000	2004	2008	2012	2016	2020	
	指揮者 (略号)		大	ダ	ラ	ラ	ラ	ラ	朝	ラ	ヴ	八	朝	林	林	ラ	中	中	中	中	中	中	中	中	中	松
	第1部																									松
1	Sinfony		1	1	1	1	1	1	1	○	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	Acc (T)	Comfrot ye my people	2	2	2	2	2	2	2	○	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	Air (T)	Ev'ry valley shall be exalted	3	3	3	3	3	3	3	○	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	Chorus	And the glory of the Lord	4	4	4	4	4	4	4	○	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	Acc (B)	This saith the Lord	5	5	5	5	5	5	5	○	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	Air (B)	But who may abide	6	6	6	6	6	6	6	○	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	Chorus	And He shall purify		7		7		7		○	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	Rec (A)	Behold, a virgin shall conceive	8	8	8	8	8	8	8	○	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	Air (A) & C.	O thou that tellest	9	9	9	9	9	9	9	○	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	Acc (B)	For behold, darkness				10		10				10				10		10		10		10		10	10	10
11	Air (B)	The people that walked						11					11	11	11	11		11		11		11		11	11	11
12	Chorus	For unto us a child is born	10	12	12	12	12	12	12	○	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13	Pifa		11	13	13	13	13	13	13	○	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14a	Rec (S)	There were shepherds	12	14	14	14	14	14	14	○	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
14b	Acc (S)	And lo, the angel of the Lord					14a	14		○	15															
15	Rec (S)	And the angel said unto them		15	15	15	15	15	15	○		15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
16	Acc (S)	And suddenly there was		16	16	16	16	16	16	○	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
17	Chorus	Glory to God in the highest	13	17	17	17	17	17	17	○	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
18	Air (S)	Rejoice greatly	14			18		18			18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
19	Rec (S)	Then shall the eyes of the blind	15	19	19	19	19	19	19	○	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20	Air (S)	He shall feed His flock	16	20	20	20	20	20	20	○	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
21	Chorus	His yoke is easy	17	21	21	21	21	21	21	○	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
	第2部																									
22	Chorus	Behold the Lamb of God	18	22	22	22	22	22	22	○	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22
23	Air (A)	He was despised		23	23	23	23	23	23	○	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
24	Chorus	Surely He hath borne our griefs	19	24	24	24	24	24	24	○	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
25	Chorus	And with His stripes		25	25	25	25	25	25		25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25

